

デューイのプラグマティズムにおいては、「探求の方法」としての「科学的手法」が思想上のひとつの特徴である。それは、問題状況の発見、具体的事実の観察、仮説、予測、データの制御、行為による検証・実験を経て結果を導くという問題解決的思考の方法である。さらにデューイの言う「科学」は、哲学を人間と社会の諸問題の解決のための道具として創り直すという『哲学の再構築』(*Reconstruction in Philosophy*) (1920年)の試みとも不可分である。この観点からみるなら、「科学」は倫理とも不可分であり(『人間性と行為』1922年)、また、芸術(アート)とも手を結ぶとデューイは述べる(『経験と自然』1925年)。このように、デューイのプラグマティズムにおける「科学」は広義な意味を持ち、実証主義的科学の範疇に収まるものではない。しかし同時にデューイの「科学」的志向は、科学的知性を過度に信頼する進歩主義として、今日に至るまでプラグマティズムに向けられる批判の一要因ともなっている。

本発表では、こうして論議の対象となってきたデューイのプラグマティズムにおける「科学」の位置づけを明らかにする上でのひとつのアプローチとして、論理実証主義との関わりの中から、プラグマティズムと「科学」の関係を捉え直すことを試みる。その手がかりとして、ウィルソン(Daniel J. Wilson)の論文「肥沃な土壌:プラグマティズム、科学、論理実証主義」、および、ヒックマン(Larry A. Hickman)の論文「プラグマティズム、テクノロジー、科学主義:科学的—技術的学問分野の手法は社会問題への関連性をもつか」の二つをレビューする。本発表で論じられるプラグマティズムの「科学」の意味が、ワークショップの他の発表との対比、対話を通じて、一層浮き彫りになれば幸いである。